

# リレーゲーム

ksk

## レンタルビデオ店

---

「お前は一体何を考えているんだ。やる気があるのか」

上司がどこを見てるのか判らない目で言った。何も考えていないし、やる気なんてこれっぽっちもない俺も俺だが、上司は上司で何を言いたいのかさっぱり分からない。だいぶ頭皮が露出している上司の頭頂部より薄い内容の「ご指導」を、俺は耳の穴から耳の穴へと聞き流す。

人生で最も大事なものはスルースキルだ。社会人になり、灰色の生活を数年続けたところで俺はそういう結論に達した。目の前にある嫌なものを無視する能力。それさえ身につければ、相対的に人生には楽しい部分しか残らない事になる。

俺が「ご指導」賜っている間の他の同僚たちも、完全に俺と上司をスルーしている。おかげで俺は窮屈な思いをすることもない。恐らく、同僚たちの誰かが今の俺の立場になった時も、俺と他の同僚たちはそいつをスルーするだろう。なんと美しい関係だろうか。涙が出そうだ。

聞き流すという重要な仕事を終え、本日も定時を二時間すぎるまで、皆で仕事をしているという体裁を整えるという美しい日本企業社会の慣行を全うした俺は、同僚達に「お疲れ様」と侮蔑の言葉を吐いて席を立った。

灰色の男たちと、カラフルで色気のない女たちの詰まった車内で、誰のものとも知れぬ不健康な口臭に耐えながら十数分。俺はゴールテープを切るつもりで改札を出た。

俺はレンタルビデオ店に向かった。特に目当ての物があるわけではなかった。映画観賞なんて高尚な趣味があるわけでもないし、今夜をピンク色にするつもりでも無い。平坦な美少女キャラにも興味はない。帰りにコンビニを物色するようなものだ。まっすぐ帰るだけでは今日一日が灰色すぎてよくない。

店内に入ると「しゃーせーい」と若干卑猥にも聞こえる女性スタッフのやる気に満ちたテンプレート発言が耳に入る。ちらっと見ると、どうやら大学生ほどの年齢らしいポニーテールのメガネの女性がレジに立っている。顔は悪くない。清楚でも小汚くもない、おっさんのセクハラ発言を上手にかわしそうなタイプだ。社会でうまくやっていこう。

適当に映画コーナーをぶらつく。洋画のパッケージを端からひっくり返してみた。どれも爆発シーンが描かれている。作法みたいなものなのだろう。もちろん、借りたりするわけではない。

そのまま邦画、アダルト、ハウツー、芸人と見ていく。特に面白いものはない。場末の、しかも大手チェーンでもないレンタルビデオ屋なんてこんなものだろう。自分の人生みたいなものだ。誰に注目されるでもない、面白い話があるでもない、並み以上の色気のある話も笑いもない。せめて洋画の様に派手に爆発でもしてくれればいいのに。いや、でも全部の映画で爆発していたら自分の爆発もまた凡庸になるか。

俺は芸人の棚の最後に『8時だよ！全員集合！』のパッケージを見ながら「だめだこりゃ」と呟いて、レンタルビデオ店から出て行った。

-----  
NEXT... レンタルビデオ店員 井垣 舞